

漢字と文化

漢字文化の全き継承と発展のために

京都大學 21 世紀 COE 東アジア世界の人文情報學研究教育據點

第 3 号



目次

顔文字は文字なのか 安岡孝一	2
バルセロナ訪書略記 高田時雄	5
ドイツ・ミュンスター大学より 富谷 至	7
「唐代ナリッジベースの可能性」ワークショップ クリスティン・ウイッテルン	9

大唐西域記序

攝寺

顔文字は文字なのか

安岡孝一

New York Public Libraryで19世紀の雑誌を漁っていたところ、タイプライタ雑誌の中で下図の記事¹⁾に出くわした。1890年2月6日付 Berkshire News (Great Barrington, Massachusetts) からの転載のようだが、「he Said it would Be a thxng of beavty & jOy FORever」の直後に、今で言う顔文字 (winking smiley) が見える。もちろん、これが本当に顔文字

SINS OF THE TYPEWRITER.

A good many jokes have been perpetrated at the expense of the typewriter, but the following from the *Berkshire News* deserves reprinting:

Greatt Barrington, feb 6 1890

De@R Friend

I. have ?ust bOough! ? a tripe waiter (No. d—\$ lt a T. Y. P. E. W. R. T. E. R.) Am nOw Dev@ting @ little lei\$ure time to gEtting acuuainted with It. the Agent s@ld itt. cood [could] be learned inno time ;n Able—bodied m@n o2 wrxte 100 letters A dAy—i @m no ! able bodjed juSt now owing 2 Anaxident I hed While squatinG;, i wrote8\$4 letters in one !ay & they aLl loaked wurse th an this. he Said it would Be a thxng of beavty & jOy FORever ;) i wishe he w*uld come back. I want See him very BA@d. I have h ad this type writer only 2 Days & uzed up Al ready 27 reams of paper also got t)e infernal thing Soit wont wRite any thing bZt Xolopuck or R ussian, he told me It W!s cus to Mary 2 h@ve patience, that's All right; after i get through w4th Hin dR smaLl will have one More, i paid \$17'74 for the type writea- and have conclzded tr trade IT off for A dOG then .f(I can borrow a Gun. J'llkill him. Good bZe more latter exbses my 1*SS-1-\$

を意図したものかはわからない。John Keats の元ネタ²⁾では、この行の末尾にコロンがあるので、それを打ち間違った可能性も否定できない。しかしまあ、これをサカナに、顔文字についてちょっと考察してみるのも悪くはないだろう。

電子メールや電子掲示板で用いられている顔文字の起源は、Scott Elliott Fahlmanが1982年に考案した :-) だとされている³⁾。日本では、若林泰志が1986年に考案した (^_^) が、もっとも古いと言われている⁴⁾。しかし、1980年代というのは、いくらなんでも最近すぎやしないか。スマイルバッジが流行ったのは1971年のことだ⁵⁾。あるいは下図に示した映画広告⁶⁾は、1953年公開の映画『Lili』のものだ。世の中にこれほど☺が氾

Today

* ☺ You'll laugh

* ☹ You'll cry

* ☺ You'll love

Lili

A screenful of TECHNICOLOR enchantment with song, ballet and romance. Delightful Leslie Caron (of "An American in Paris", fame) plays a lonely girl who finds a haven and love with a travelling carnival. As gay as its hit-tune "Hi-Lili-Hi-Lo"

M.G. M. presents "LILI" starring LESLIE CARON • MEL FERRER • JEAN PIERRE AUMONT • with ZSA ZSA GABOR • KURT MASZYAR • Screen Play by HELEN DEUTSCH Based on a Story by PAUL GALLICO • Directed by CHARLES WALTERS • Produced by EDWIN H. KNOFF

EXTRA!
Two Outstanding Short Subjects!
• Mary Ellen Bick's "Spook Sport"
• Academy Nominee "Romance of Transportation"

WORLD PREMIERE
TODAY • TRANS-LUX 52nd on Lexington
PL. 3-2424
DOORS OPEN 11:45 A. M. • Feature at 12:35, 2:25, 4:10, 5:50, 7:45, 9:35, 11:20

濫していたのに、本当に1982年に至るまで、顔文字はコンピュータに取り入れられなかったのだろうか？

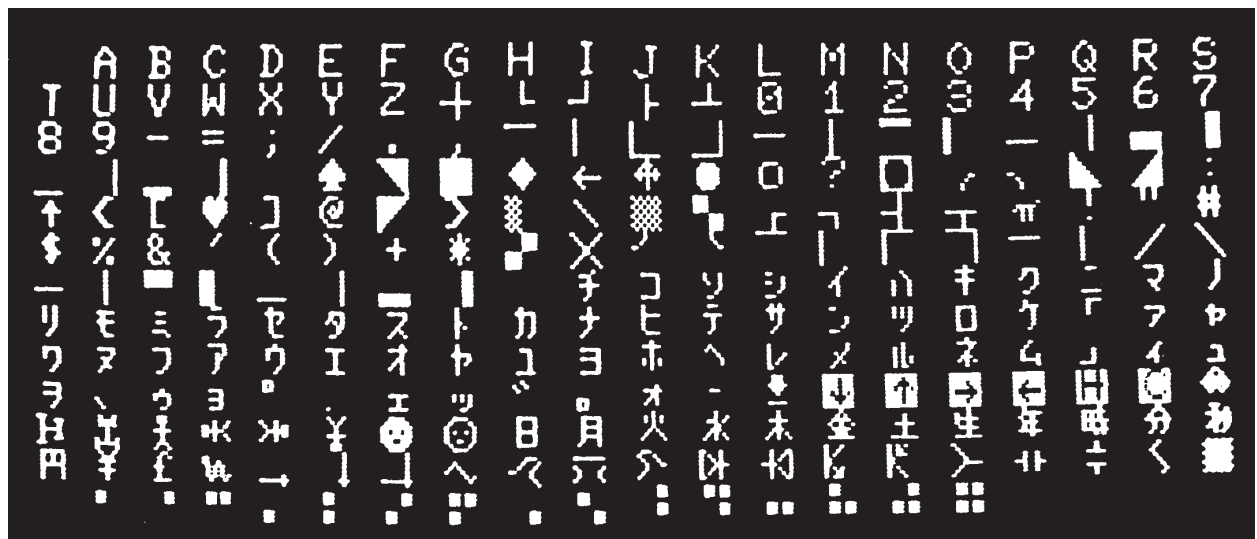
ここまで考えたところで、筆者はハタと、あるパソコンに思い至った。SHARPのMZ-80Kだ。1978年発売のあのパソコンには、顔の形をした文字が搭載されていた(下図⁷⁾)。8ビットの文字コードが採用されていたのだが、英小文字すら収録されておらず、代わりに人や蛇やUFOやトランジスタが収録されているという、独特の文字コードだった。MZ-80Kのユーザは、最初から顔文字を自由に使える環境にあったのだ。

では、☺を含む文字コードは、他にはないのだろうか。調査してみたところ、1971年に国立国会図書館で開発された文字コードであるNDL-70には、☺が含まれていた⁸⁾。筆者が発見できた中では、これがいちばん古いものだった。ただ、NDL-70は国立国会図書館の独自コードであり、あまり一般性がない。もう少し広く流布したものはないか、とさらに調べてみたところ、なんとIBM PC内臓の文字コードには、☺と☹が含まれている⁹⁾。IBM 5150の発売は1981年だから、何のことはない、Fahlmanが:-)を考案する以前に、☺を内臓したコンピュータは、世界中にバラまかれていたのである。

だとするとなぜ、Fahlmanは:-)を考案しなければならなかったのか。彼のディスプレイは☺

を表示できなかったのだろうか。これは、そう考えるべきなのだろう。Fahlmanが最初に:-)を書き残したのは電子掲示板であり、さまざまなコンピュータのユーザがそれを読む可能性があった。そういう場で確実に文字を伝えようとするなら、当時のアメリカではASCIIの範囲内の文字を使うのが安全だ。ASCIIに☺はないから、ASCIIの範囲で文字を組み合わせた:-)は妥当な選択と言える。日本においても、☺はJIS X 0201にもJIS X 0208にも含まれていないから、若林は(^_^)を作り出したと言える。これら考案者たちは、制限のある文字コード上で、如何に簡潔で美しい表現を生み出すか腐心したに違いない。

しかし、現在の日本の状況は、考案者たちの置かれていた状況とは、大きく異なっている。ほとんど全てのパソコンはUnicode対応となっているし、携帯電話もJavaが動いてあたり前の時代だ。UTF-8こそが文字コードの標準であり、ここでは☺も☹も表示可能である。それにもかかわらずユーザの多くは、☺などには目もくれず、次々に新たな文字の組み合わせを考案し、それらの顔文字を情報交換しあっているのだ。これはいったいどういう現象なのだろうか？ 次々に新しい顔文字が現れる現状を「ケータイ文化」と呼ぶむきもあるようだが、これは本当に「ケータイ」や「ネット」に限ったことだろうか。既存の文字の組み合わせで新しい文字を大量に作り出してきた



文化を、我々は他に知らないだろうか。

思うにこの現象は、漢字文化圏においてはここ四千年の間、ごく普通におこなわれてきたことと、本質的には同一である。必要とする表現に対して新たな文字を生み出す、というのは、漢字文化圏の血には無条件で楽しいのだ。康熙字典までに何万字も作ってきたにもかかわらず、戦後に簡化字や当用漢字を生み出したのも、結局はそういう血なのだろう。しかもそれは漢字に限らない。カタカナだって、ハングルだって、考えた連中は楽しくてしかたなかったはずだ。顔文字だって、そうに違いない。ただ、顔文字は多くが記号の組み合わせであり、構成原理が漢字やその周辺の文字とは多少違っているような気がする、というだけのことだ。

しかしながら、顔文字は文字なのか、と問われると、現時点では筆者はイマイチ自信がない。現在の顔文字は、音声言語との対応を著しく欠いている、という点で、文字と呼ぶには、はなはだコロモトないのだ。もちろん、音声言語を持たない文字というのもありえるのだが、それよりもいっそ、顔文字を「しゃべる」人たちが現れてくれれば、と筆者は願ってしまうのである。漢字を日本語で読む、という荒業に挑戦した者たちの末裔ならば、顔文字を「しゃべる」くらい造作もないことのはずだ。顔文字と音声言語との対応がつかないのはいつのことなのか、未来の女子高生たちに期

待したいと思う。

- 1) "Sins of the Typewriter", *The Typewriter World*, Vol. I, No. 2 (October 1897), p. 46.
- 2) John Keats: *Endymion: A Poetic Romance*, London: Taylor and Hessey (1818).
- 3) Katie Hafner: "Happy Birthday :-) to You: A Smiley Face Turns 20", *The New York Times*, Vol. CLII, No. 52246 (September 19, 2002), p. G4.
- 4) "絵文字の謎～IT時代・変わるコミュニケーション", *クローズアップ現代*, No. 1535 (2002年1月24日).
- 5) "海外トピック", *アサヒグラフ*, 2494号 (1971年10月8日), p. 82.
- 6) "Lili", *The New York Times*, Vol. CII, No. 34744 (March 10, 1953), p. 26.
- 7) "LOAD TEST No. 1 シャープMZ-80K", *ASCII*, Vol. 3, No. 5 (1979年5月), pp. 45-51.
- 8) 安田健: "国立国会図書館における漢字情報システムについて一字種決定および入出力機器の機能を中心に一", *科学技術文献サービス*, 第43号 (1975年10月), pp. 1-13.
- 9) Gregg Williams: "A Closer Look at the IBM Personal Computer", *Byte*, Vol. 7, No. 1 (January 1982), pp. 36-68.

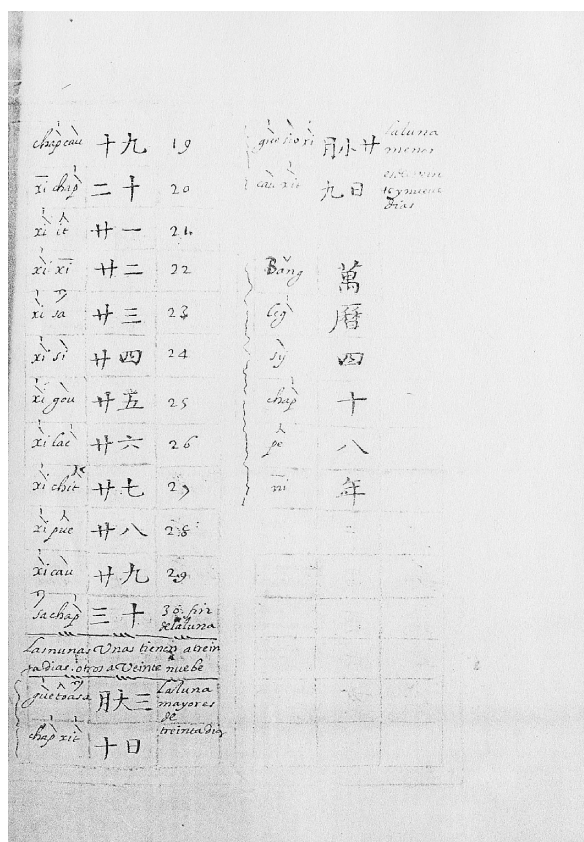
バルセロナ訪書略記

高田時雄

三月、ローマへ行くついでにバルセロナに足を延ばして、以前から見ておかねばならないと思っていた寫本を見ることにした。ホテルへの到着が夜中の11時半、翌々日の午後にはもう空港の待合室にいたから、この町に居たのは都合40時間ほどのことになる。そのうちの15時間を図書館で過ごした。そんなわけで名にし負うサグラダ・ファミリア教會も見ずじまいであった。食事のために外へ出た時、サッカー・ファンが旗を振りながら大擧して行進しているのが印象に残っているくらいで、カタロニアの都を観光する暇のなかったのはやや心残りである。

さて今回目的としたのはサングレイ語文法の寫本である。サングレイ語というのは、400年ばかり以前にフィリピンはマニラで交易に従事していた福建商人の言語、すなわち古い閩南語ということになる。チンチェオという名稱で呼ばれることもあるが、それは彼らが船出をする故郷の港町チョンチェオ（漳州）を指し、ローマ字綴りの混乱も手傳つて、スペイン人をはじめヨーロッパ人にはこういう名前と呼ばれていた。

この寫本を所蔵するのはバルセロナ大學の図書館。いづこも同じ、この大學も郊外に本據を移しているが、幸い図書館の善本室は文獻學部とともに中心部の古い建物に留まっている。閱覽室はその古建築の二階にあって、近代的に改装してあり快適である。善本室はその一番奥にあるドアの更の中。朝早いので若い司書が一人居ただけだが、愛想よく應對してくれ、すぐに目的の寫本を出して来てくれる。コンピュータの使用も可。ただ寫本が小さな字で書いてあるのと照明がよくないので、寫本を見るときは眼鏡を外し、コンピュータを打つときは眼鏡をかけるという鹽梅で、能率



サングレイ語文法寫本の一葉
「萬曆四十八年」の紀年が見える

の悪いこと甚だしい。ここ一年のあいだに老眼が進んだのは明らかで、この手の仕事はそろそろ限界かと思う。

格闘相手の寫本はといえば、木版で罫を印刷した中國紙を用い、各ページを二段に分かって、筆記體のスペイン語で書かれている。萬曆四十八年(1620)の年號が寫本中に見えるので、恐らくこの年に現地で書かれたものと思われる。丁寧な書體で、文字を読むことにはさほどの困難はない。すべてのサングレイ語には漢字が添えられている



バルセロナ大學圖書館の建物

ので、実はそれも解讀の助けになる。同じ文法の別の寫本がロンドンの大英圖書館にあることが知られている。その寫しを持參して比較したところ、かなりな部分に異同が見られた。ロンドン本には書き加えたと覺しき部分が間々あり、バルセロナ本の方が原姿を留めているように思われる。

この文法の作者については、アウグスチノ會士マルティン・デ・ラダとする説もあるようだが、定かではない。バルセロナの寫本には、卷頭にドミニコ會士のライムンド・フェイホ神父が用いた本である旨の書き込みがある。少し調べた限りでは、この人の名を在フィリピンの宣教師中に見いだすことが出来ない。スペインに居て、サングレイの言葉に興味を抱いたとすれば、よくよく奇特なことと言わねばならないが、その事情は知るよしもない。

晝近くになって、館長先生が悠然と出勤して來られたので、中國物がほかにはないかと尋ねてみた。いかにも圖書館長然とした、眼鏡に髭の老先生は、漢字が書いてあるのはとにかくこれだけだと、二の句を繼げぬそっけない返事。バルセロナの「漢字文化遺産」訪問は、かくして翌日もサングレイ寫本の筆録に費やすこととなった。飛行機がローマに着き、さらにテルミニの驛に辿り着いた頃には、もう日は暮れていた。

ドイツ・ミュンスター大学より

富谷 至

去年あたりから実感しだしたのだが、自分の教育・研究面での蓄えが底をついてきた。このあたりで、改めて充電し直さねば、研究者としての最後の第四コーナーを走りきることはできない。独創性のある論文を常に発表し続けないと、学界のみならず学生からも相手にされなくなり、老兵は去るしかない。定年まであと十年余だが、「あの人、若いときには論文を出していたようですが、五十を過ぎてからは、さっぱりですね」、これは、私自身も口にし、またよく聞く台詞だ。

そういった危機感を抱いていた折りもあり、ドイツ・ミュンスター大学中国学研究所が客員教授として招聘してくれた。週一回、授業（「中国古代の書写材料」：<http://www.uni-muenster.de/Sinologie/>に講義内容がある）をするのだが、あとは特別な義務はない。まさに充電のための絶好の機会だと、有り難く承諾した。ただ、私のような年齢のものは、大学内でいろいろな仕事、委員をしており、長期の海外滞在は無理である。ましてや、大学制度が変わる時期においてはなおさらで、私も研究所においては、各種委員、研究班長、大型科研代表者、そしてCOEの分担者としての責任があり、ドイツ滞在を口にしたとき、当時の庶務掛長に「先生、それは正気ですか？」と真顔でいわれたのだ。果たさねばならない責務からエスケープして、所員各位、事務方には、本当に申し訳ないと思っている。せめて、私にできることは、COEをはじめとする研究と教育の成果を充実したものにするため、自分の研究に邁進し還元することしかないのだ。

かくしてミュンスターでの静かな生活がはじまったのだが、早速耳にしたのは、evaluationという言葉で、内部評価と外部評価、そして個人評価

が、それぞれ、ここドイツの大学でもはじまっていた。今し方、この文を書いている私の部屋に立ち寄った主任教授は、これからチュービンゲン大学に出張だ、その大学が新しいアジア関係の研究所を設置したのでその第三者評価（そのような言葉ではなかったが）の為にいく、これがその資料だ、と分厚い書類を見せてくれた。そんなもの私は見たくなかったのだが、一瞥した頁には、京都の某私大との国際学術研究云々の条項があった。

また、この四月から急に出来た問題として、研究所の統廃合が取りざたされだした。私がいる研究所の建物には、他にインド学、エジプト学、アラブ・イスラム学などの研究所があるのだが、そのなかで、学生数が少なくなった研究所を他のところに合併させ、いくつかの研究所をまとめて、新しい、たとえばアジア学研究所といったものを立ち上げることを検討するよう、大学当局から示唆されたのだ（大学本部は具体的なことは言わず、現状を改革せねばならないから研究所が良い案を出してくれという）。



ミュンスター大学 中国学研究所のある建物



研究所入口の看板

中国学研究所は幸いに学生数も多く（といっても、現代中国語を学ぶ者と、アジア、とくに中国からの留学生が多いだけで、古典中国を専攻するものは極めてすくないのが現状）、廃止ということには当面はならないが、他の研究所と一緒にみると、例えばポストなどは、他の研究所と貸し借りをを行う中で、やがては削減されてしまう危険性がある。統合合併には乗り気ではないが、現状維持はもはや認められない。ポストにかんしていえば、その流用にあたり、大学当局と契約書を取り交わしても、どこまで守られるか。

言っておきたいが、以上は、私が殊更にものしたフィクションではない。この酷似は、信じられないが本当なのだ。「お前はいいなあ、そこから逃げてきて」というドイツの同僚の視線に、ここ

でも申し訳なく身を小さくしている。

いま少し、蛇足をくわえる。ミュンスター大学中国学研究所が、私を招聘してくれたその第一の理由は、上記の評価と研究所の存続に関わってのことである。何も私が高名で、また私の研究が優れたものというわけではない。私の招聘・滞在費は、German Research Councilというドイツの学術振興会からでているのだが、これは所謂「競争的外部資金の獲得」に属する。海外の「著名な」研究者を招き、教育研究の活発化と国際交流を図っている実績をつくることで、評価を得るための事業の一環なのである。なんと我が人文科学研究所の思惑と肝胆相照らすものではないか。海外の研究機関との研究・教育における学术交流、これはドイツの研究所にとっても存亡がかかる重要課題に他ならない。こちらの主任教授はZINBUNとのより密接な交流を願っているのであり、互いに交流のための外部資金を獲得して、実績をあげ、それでもって高い外部評価を得ようとしている。私も自分のための充電だけではなく、相互の交流が恒常的にかつ効果的につづくようなフレーム作りに努力しよう。さすれば、日本・ドイツ両研究所の同僚の私を見る目も、和らいでくるに違いない。



中国学研究所図書室

「唐代ナリッジベースの可能性」ワークショップ

クリスティアン・ウィッテルン

2004年2月20日および21日の両日、京都大学人文科学研究所において「唐代ナリッジベースの可能性—唐代研究のための包括的電子アーカイブの構築を目指して—」と題するワークショップが開催された。21世紀COEプログラムにおいて唐代ナリッジベース構築作業が開始されたことを承けて、このプロジェクトの発展に寄与しうる研究者を招き、ブレインストーミングや意見交換を行うことを目指すものであった。

文化遺物のデジタル化に関する作業は、以前から台湾において大規模に展開されており、さらにここ数年は、個々の研究プロジェクトを国家レベルで統合する試みもなされている。そこで台湾の研究者達をこのワークショップに招き、彼らの学識と経験を披瀝してもらうことにしたのである。幸いにも、招聘したパネリスト達は、歴史・言語・地理およびシステム構築という多様な分野について、その見通しと、様々な方法論的アプローチのサンプルを提供してくださった。

一日目は公開ワークショップとし、いくつかのプレゼンテーションが行われた。最初に、台湾中央研究院資訊科学研究所の謝清俊教授により、資料電子化に関する概観が述べられた。台湾中央研究院における漢字のエンコーディングと二十五史データベース作成をもって知られる謝教授は、まず、情報を構成する要素とは何か、情報が、全ての文化的活動の構成要素となるコミュニケーションに対してどのような関わりをもつのか、という点から説き起こし、エルンスト・カッシーラーおよびスーザン・ランガーの研究に触発された美学記号論的議論を行った上で、情報の核と見なしうるもののカテゴライズ、およびそれがデジタル化



質問に応じる謝清俊教授

の過程と可能性とにどう影響しうるかを論じた。

チャールズ・ミュラー教授によるコメント、および数分間の議論のあと、コミュニケーション科学の学位を持ち、台湾国立政治大学ジャーナリズム学科で教鞭を執る謝瀛春教授が、報道の内容を捕捉するためのマークアップ技術の利用に関する彼女の研究と、それがいかにして報道された事実へとつながる多角的視野や解釈の道を供給しうるかという点に関して報告を行った。教授はまた、たとえば唐代に関する歴史的事実の報告や記述のエンコーディングおよび、歴史資料の分析に対して、これがいかに有効に適用しうるかという点に関する類推をも提示した。

休憩の後、歴史地理情報システムの専門家であり、中央研究院計算中心のプロジェクトリーダーでもある廖泫銘氏が、残念ながら急遽本ワークショップへの出席をキャンセルしなければならなかった中央研究院歴史語言研究所の范毅軍教授に代わり、近年の地理学情報システム（GIS）の発達によって開かれた多様な可能性へと聴衆を誘った。



ワークショップ終了後の記念写真

特に有望に思われたのは、テキスト・データベースその他の情報と、歴史地図データの統合であり、それはすでに范教授による「中華文明之時空」プロジェクト（1996年）の中で実現されているものでもある。

この日の午後の最後の発表者は台湾中央研究院語言学研究所の黄居仁教授であった。黄教授は、「現代漢語平衡語料庫 (Sinica Corpus)」, 「近代漢語標記語料庫 (Academia Sinica Corpus of Early Mandarin)」, あるいは最近の「中央研究院中英雙語知識本体詞網 (Academia Sinica Bilingual Ontological Wordnet (BOW))」などを含む多くの中国語資料やアーカイブの構築を主導しており、また、元智大学の羅鳳珠教授と共同で唐詩オントロジーのプロトタイプの開発も行っている。このオントロジーは Sinica BOW をベースとしており、後者は特定のナリッジベース構築のためのレファレンスと下部構造とを提供しているのである。この事実は Sinica BOW が、唐代文明のような特定の知識体系をエンコードし、記述するためにも適用可能であることを確信させる。現在まで、動物、植物、工芸品の三つのオントロジーが構築され研究されており、それは例えば唐詩における「シェークスピアの庭園」、つま

り唐代の詩に見える全ての植物を含むデータベース、の構築を可能とするだろう。

この発表の後にも、やはり活発な議論があったが、残念ながら時間の関係で打ち切らなければならなかった。初日の公開ワークショップの内容は以上の通りである。

翌日、発表者とコメンテーターは、唐代ナリッジベース・プロジェクトのメンバーや、人文科学研究所のスタッフとともに、非公開の議論の場を持ち、プロジェクトの現状と今後の見通しに関して終日検討を行った。この日は、クリスティアン・ウィッテルンによる唐代ナリッジベースに関する背景説明、作業計画および現状についての詳細な報告から始まり、ミューラー教授や発表者達から多くの貴重なコメントが寄せられた。昼食後も議論は続き、いくつかの具体的な提案もなされた。例えば、唐代に用いられた異なる暦をどのようにエンコードするのか、あるいはナリッジベースの内容が唐代に関する辞典の作成にどのように利用しうるか等々である。それ以外にも、プロジェクトに関与する諸機関の間でのデータ共有に関する方針の確立、研究者の教育・養成をプロジェクトに組み込むこと、などが話し合われた。

全体的に見て今回のワークショップは、意見やアイデアの交換の場を提供するとともに、唐代ナリッジベース計画にとってきわめて生産的な調整の場として機能したと言える。発表の抽象と発表者に関する情報は、COEプログラムのウェブサイト (<http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp>) にて閲覧することができる。また、発表内容は別個に報告書として刊行されることになっている。

最後にこの場を借りて参加者、出席者およびこのワークショップ実現のためにご尽力くださった全ての方々に心より謝意を表したい。

TOPICS

21世紀 COE 特別講演会「中国における書物の伝統」の開催

平成16年3月10日（水）10時より、京都大学人文科学研究所北白川会議室において、表記の講演会を開催した。報告者はお二人。中国国家図書館副館長の陳力氏が「二十世紀古籍辨偽學之檢討」、同分館副館長の孫学雷氏が「印章流變與國圖普通古籍藏書印述略」と題して、それぞれ熱弁をふるわれた。陳氏の報告については漢字情報研究センター教授井波陵一氏が、孫氏の報告には慶應義塾大学斯道文庫助教授高橋智氏が、それぞれコメントーターを担当した。陳力氏は、現在中国で精力的に推進されている全国的な古典籍データベースの中心的役割を果たしておられる。漢字情報研究センターでは数年来「全国漢籍データベース」の事務局を担当し、鋭意データベースの建設を進めつつある折でもあり、色々と参考となるお話をうかがうことが出来たのは幸いであった。陳氏にはまた、二日後の3月12日（金）東京で開催された第4回全国漢籍データベース協議会総会でも「中國古籍數字化的現状與展望」という講演をお願いし、全国の研究者、図書館職員の方々と意見交換を行うことが出来た。一方、孫氏は現在分館（文津街にある北京図書館旧址で、老館とも呼ばれ、主に普通綫装本を収蔵する）所蔵古籍に見える蔵書印のデータベース化を進めておられ、画像の紹介とともにその成果の一部を披露された。お二人の報告は近く印刷に附するとともに、ウェブ上でも公開の予定である。（高田時雄）

今後の主な行事予定

- ・平成16年9月6日（月）～9月10日（金）
東アジア人文情報学サマーセミナー開催（10名程度の受講者を対象とする集中講義）
詳細はおってウェブサイトに掲示されます。
- ・平成16年11月18日（木）～11月21日（日）
京都大学人文科学研究所開設75周年記念シンポジウム（21世紀 COE プログラム共催）
「中国宗教文献研究国際シンポジウム」
京都大学百周年時計台記念館二階国際交流ホールにて
詳細はおってウェブサイト、ポスター等で報知される予定です。

Chinese Characters
and Culture



発行日 2004年 6月30日
発行者 文部科学省21世紀 COE プログラム
「東アジアにおける人文情報学研究教育拠点—漢字文化の全き継承と発展のために—」
住 所 〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47 京都大学人文科学研究所
電 話 075-753-6997 FAX 075-753-6999
e-mail coe@zinbun.kyoto-u.ac.jp • Web Site <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

